

俳人
夏井いつきさん

NATSUI
ITSUKI

【なつい・いつき】昭和32年愛媛県内海村（現愛南町）出身。中学校の国語教諭として8年間勤めた後、俳人へ転身。平成6年「第8回 俳壇賞」を受賞。俳句集団「いつき組」組長として、俳句の授業「句会ライブ」をはじめ、「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。TBS系の番組「プレバト!!」の俳句コーナーなどテレビ、ラジオにも出演。松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」等で選者も務める。平成27年より初代俳都松山大使。『夏井いつきのおウチde俳句』（朝日出版社）の他、著書多数。

お座席くじから始めた俳句に導かれて

INTRODUCTION

芸能人の作品を各分野のプロが評価するテレビ番組『プレバト!!』（TBS系）で、人気コーナーとなっている「俳句」。俳人の夏井いつきさんが添削をすると、作品は素人目にもはっきりわかるほど劇的に変化する。歯に衣着せぬ作品評価は痛快でありながら、温かなまなざしが伝わってくるようだ。中学校で国語を教えていたという夏井さんに、俳句を始められたきっかけから、教員時代のこと、現在の活動について話をうかがった。

——俳句ブームの火付け役と言われ、活躍

の夏井さんですが、ご自身が俳句を始められたきっかけは何だったのですか。

大学卒業後、中学校の国語教員として働いていたのですが、新人で配属された時、懇親会の係になったんですね。懇親会では必ず5分遅れて来られる先生がいらっしやうて、その5分間をなごやかな雰囲気になれないかなど。そこで思いついたのが、席決めて使うくじの番号の代わりに、俳句を書いた紙を渡すという方法でした。

最初は歳時記をめぐって有名な俳人の句を書いたのですが、それが思いのほかウケまして、2回目はもつとウケたくなって自分で句を作ったんですよ、内輪ネタを使って。内輪ネタってウケるじゃないですか。盛り上がりつつ席に着くまでがちょうど5分くらいで、いい感じだと。それが俳句を作るようになったきっかけです。

自分が創作者になると考えたらずいぶん出さなかつたかもしれないんですけど、お座席くじを作ることが目的だったから、気軽に

始められたんですね。

——言葉や文学には小さい頃からご興味がおありだったのですか。

理系の科目は苦手でしたし、英語はよそのお国の言葉という感じだし、国語以外にできる教科がなかったですね。本屋さんもないような海辺の小さい村で育ちましたが、両親が本だけは定期的に届く環境をつくってくれていました。

——『少年少女世界文学全集』ですか。

そう！ それです。妹がいましたので、新しい本が届いたら、奪い合うようにして読んでいましたね。それが文学という意味での下地だったのかもしれない。

——京都で学生時代を過ごされた後、故郷の愛媛に戻りたいということ、先生になられたのですか。

言葉に近いところで仕事ができたらとは思っていましたが、大学4年間はバレーボールに打ち込んでいましたし、今みたいに早いうちから就職活動を始める時代じゃなかったですからね。愛媛に帰りたいけれど、出版や編集の仕事で就職先を探すのは難しいんじゃないかという理由で、先生も選択肢の一つくらいの気持ちでした。

ところが、教育実習で行った現場がすごく素敵でしたね。母校の中学校で1学年1クラスしかないのですが、国語専門の先生が1人もいないから、数学や美術、社会科の先生が兼務で国語を教えていました。そんな状況で、研修主任の先生に「好きなようにどうぞ」と言われて、好きなように授業をしていたところ、数学の先生が私の教え方に妙に感心してくださったりして…。

お座席くじを作ることが目的だったから、気軽に始められたんですね。



Haiku Poet
NATSUKI ITSUKI



どこを中心に教えたら、この子たちは面白いと思ってくれるか。

——上から目線じゃなかったんですね。

それもありますし、先生方がチームとして素晴らしかった。研修主任の先生の教育者としての姿勢にも感銘を受けて、そこから何が何でも先生になりたいと思うようになりましたね。愛媛県内での採用数が全教科合わせても若干名でしたので、教員採用試験までの1カ月間は大学入試の時よりも真剣に勉強しました。

——無事に採用され中学校の先生となられたわけですが、仕事は面白かったですか。

人間が最も大きく変化するのが中学校の3年間なんですよ。毎日いろんな出来事がおきながら、クラスというものが生き物になっていくメカニズムも面白かったですし、国語の教科書をどう教えるかを考える教材研究も大好きでした。同じ学年でもクラスによってカラーは全然違いますから、

クラスごとに全部異なる指導案を書いて試したりしていました。

赴任先の中学校では生徒たちに好きな教科アンケートを取っていたのですが、毎年国語が最下位だと聞いて「だったら、国語が1位になることを目指そう!」と。子どもたちは面白いと思ったら授業を聞きますし、宿題もちゃんとやってくるんですよ。

——面白いと気づかせることが、先生の役目でもありますよね。

その通りだと思います。教材を指導書通り完璧に教えることよりも、どこを中心に教えたら、この子たちは面白いと思ってくれるか。お料理と一緒に、同じ材料でも、食べる人の好みや条件に合わせて料理法を変えてあげるんです。それを考えることも楽しかったですね。

——先生という仕事とご自身の俳句作りは、並行して行われていたのですか。

俳句はほんの少しやっていただけで、仕事が98%だとしたら2%くらいです。ただ、いろんな事情があつて、私が仕事を辞めることが家族にとって一番良い選択だということに達することになったんです。でも、私は大好きな仕事を辞めたくない。結論として「心」が、ちぐはぐになってしまいました。受け入れがたい結論を、どうやって自身に受け入れさせせるか。そこで出てきたのが「俳人になります」と宣言することでした。「そうか。私は俳人になるんだ」と脳に思い込ませることで、自分自身をなだめ

ようとしたのです。

校長に「俳人になります」と言ったら、「馬鹿かーッ!!」と怒鳴られました。先生たちも、「あんなに生徒たちが好きで、学校が好きで、好きな教科アンケートで国語が1位を取り続けているのに、俳人？」ってキョトンとしていました。それでも、何かを主張しないと次の一步が踏み出せなかったのです。

「俳人になります」と言ったら、資格があるわけでも、学校に行くわけでもありません。ただ、ちよつと俳句を書いているだけ。「死ぬまでにせらしくなれば、嘘をついたことにならないから、それでいい」という程度のものでした。

——自分を納得させるためだけの目標を実現するため、行動はおこされたのですか。

俳人になることは目標とさえ思っていないでしたが、やり出したら面白い文芸でしたね。

俳句はまさに「座」の文学であり、コミニティツールです。年齢も背景もバラバラの皆さんと、俳号(俳句を作る時に使う名前)のお付き合いで新しい交流が生まれます。そういうつながりができていくことが楽しかったですし、その当時60歳、70歳でも「若手」と言われるような世界に30歳そこで入っていったから、大事にされて、いろんなことを教えてもらえました。

俳句はメモ帳とボールペン1本、それに好奇心さえあれば、何もかもが句材になり

ます。日々の生活のすべてが、俳句の種を採すフィールドワークです。

愛媛県内には同世代の仲間が少なかったので、パソコン通信を使って県外の同世代の人たちとつながって「十句会」というグループを作りました。「俳壇賞」という大きな新人賞があつて、皆でそれを目指すことにしたんですね。1年間に作った未発表の句を1人30句までとめて応募するんですけど、なかなか入賞できないんですよ。私は仲間が応募した句をまとめて冊子を作り、それを配って、感想や意見を述べ合う勉強会を開いたりしていました。

——自分の句を、他の誰かが全く違う角度からとらえてくれると勉強になりますよね。

そうですね。自分では素晴らしい、素敵な句だと思つていても、客観的に見ると全然伝わっていないことが多いんですよ。伝えたい内容は素敵なだけけど、技術的なところで、それが伝わらない代物になっている。自分一人で技術を高めるには限界があります。「十句会」で互いに切磋琢磨しているうちに、少しずつ仲間が最終選考に残るようになってきました。それなのに、言

い出しつぺの私だけが全然かすりもしない。

応募し始めて7年目に初めて最終選考に残つて、そのまま「俳壇賞」を頂きました。そこからですね、真剣に俳句をやるうと思いは始めたのは。

その後、思いがけずシングルマザーになった時、かつての同僚や先輩が心配して、講師をしないかと声を掛けてくださったんです。それを引き受ければ貧乏しなくて済んだのでしようけど、辞める時、校長に啖呵を切っていましたからね。

——「俳人になります」と。

そうですね。今さらおめおめと学校に戻れないという変な意地がありました。そこから俳句でご飯を食べていくにはどうしたらいいんだらうと。その時、助けてくれたのが「松山」という土地でした。

他のまちにはない松山らしさは何かと言えば、俳句です。(正岡)子規、(高浜)虚子、(河東)碧梧桐と近代俳句の3トップは松山出身なんです。彼らが俳句に夢中になり始めたのは学生の頃です。明治の若者たちが面白いと思ったものを、今の高校生たちが面白いと思わないはずがない。面白い、

俳句はメモ帳とボールペン1本、
それに好奇心さえあれば、
何もかもが句材になります。

俳句は国語だけでなく全教科や学校行事などすべてにリンクできます。



楽しいと思える料理の仕方をすれば、絶対に食べてくれると。

その軸は教員時代から全く変わっていないので、高校生たちに何とか面白いと思ってもらえる仕掛けはないかと考えて、高校生を対象とした「俳句甲子園」のアイデアが生まれたんです。

——面白い企画だなと思っていましたが、そういう経緯があったのですね。

もう一つ始めた活動が、小学校に俳句を教えに行く「句会ライブ」です。小学生のうち面白いと思わせるのが一番手間がかからないですし、先生方も全教科を教えているので柔軟性があるんですね。

俳句は国語だけでなく全教科や学校行事などすべてにリンクできます。理科の観察は俳句の写生ですし、文字で書かれた俳句を絵に描きましょう、歌ってみましょうとか、調理実習で使う野菜もすべて季語です。5音の言葉を見つけたら、子どもたちはどの教科の時間であっても、ノートを取り出して書き出します。子どもたちが言葉にアンテナを立て始めたことをすごいと思ってくださった小学校の先生たちが、句会ライブを全国に広げてくださいました。

句会ライブでは作者名を伏せたまま、私を選んだ句を大きく書き出して、子どもたち皆で議論するんですね。その後「こんなに優しい句を作る子は誰？」と思って作者名を開けてみたら、学校一の暴れん坊だったりするわけです。その瞬間、子どもた

ちの中でお互いに貼り合っているレッテルが剥がれますし、先生方にとっても「この子はこんなことを考えていたのか」と児童理解に役立ちます。

その仕組みは、一般の人たちとの句会ライブでも同じ作用をもたらすんですね。

「親の介護をしてつらいのは私だけだと思っていたのに、自分の心を語ってくれる誰かの俳句がここにある」と、たった17音の俳句を見て、皆ポロポロ泣き出すんです。句会ライブでお互いの経験を語り合って、泣いたり笑ったりしながら2時間を過ごす。そこで自分だけじゃなかったと知ったことを力にして、日常に戻っていけます。

——世代を超えたつながりもできそうですね。おっしゃる通りです。普段の生活の中で世代の異なる人と関わる機会はありませんが、句会ライブでは4〜5歳から90歳代まで幅広い年代の方が参加してくれますからね。時には、ご家族そろって三世代、四世代で参加してくださることもあります。

——皆が面白いと思うように、何か仕掛けを考えられるのですか。

仕掛けがすべてです。授業と一緒。授業というのは、自分で台本を書いて、自分で演じる舞台のようなものです。

——一人芝居みたいなものでしょうか。

そうですね。お客さんが近いところにいるので、反応を見ながら、失敗だと思えばすぐに方向転換もできるわけです。自分で書いた台本ですから。そうやって試行錯誤



を重ねる中で、句会ライブの基本形が出来上がっていききました。

それを軸に「句会ライブで人権教育をできませんか」とか「防災教育と俳句と絡ませられませんか」といった注文に応えながら生涯教育、医療福祉の現場と、俳句がお役に立てる場を一つずつ埋めてきました。ところが、私には一つ考え落としていた部分があったんですね。句会ライブでそのことに気づかされました。

ある句会ライブ参加者の方で、サイン会でも一番前に並んでくださった方がいたんですね。私が「また来てくださいね」と言ったらサインを渡したら、ニコニコなさつていたお顔が急に暗くなったんです。話を聞けば、「自分は夫と自分の両親の4人を自宅で紹介している。句会ライブが近所で開かれることを知り、夫に頼み会社を休んでもらって両親をみてもらえたから参加できた」と。最後に「誰もが外に出かけられる自由をもっているわけではないんですよ」と言われて帰られたその後ろ姿が忘れられなくて…。「私はなぜ、こんな大事なところを見落としていたんだろう」とハッとさせられました。

ご飯を頂いていいんだって、
俳句の神様に認めていたような
気がしています。

——「誰もが外に出かけられる自由をもっているわけではない」ですか。確かにその言葉は胸に刺さります。

私はそれまで「五感全体で季語を体験するのが、俳人の基本です。季語の現場に行きましょう」と伝えてきました。でも、それが叶わない人も世の中にはたくさんいらっしゃる。それを見落としていました。「お家の中にも俳句の種は山ほどあるのよ」って伝えたくて、『おウチde俳句』という本を書こうと決めました。また、その考えに共鳴してくださった出版社と「第1回 おウチde俳句大賞」を令和元年5月1日に開催しました。

大賞は参加者の投票で決まるんですけど、第2回で選ばれたのが「車椅子は置いてく白靴と杖を」という句なんですね。「白靴」が夏の季語なの。表彰式で「作者はどなたですか？」と呼び掛けたら、一人の青年が立ち上がってこちらに向かって歩いてくるんです。皆、若者が作った句と思っていなかったから、驚きましたよ。それで話を聞いたら、「これは妻を謳った句です。病気の後遺症で車椅子の生活だけでも、今日は

白靴と杖でゆっくり歩きましょう。そういう句です」って。もう拍手ですよ。それで私が「今日家に帰ったら、奥さんに何て言うの？」と尋ねたら「愛しています」って言います」って。その言葉を聞いて皆が泣いて(涙)。そんな感じですね、毎日お家で生き生きしながら、俳句の種を見つけてくれたら嬉しいじゃないですか。

人間は100%死にますし、100%動けなくなる日が来ます。その時『おウチde俳句』の1冊が支えになってくれたら嬉しいですよ。ある方から頂いたお手紙に「がんで5年間闘病をした妻を見送った後、病院のベッドサイドにこの本がありました」って書いてあって…。そういうことがあると「やめられない、この活動」って思うんですよ(涙)。

——俳人冥利につきますね。

そうですね。作家としての思いはもちろんありますけど、俳句でご飯を頂く以上、社会にも何かお役に立たないと、申し訳が立たないじゃないですか。そういう点で、「おウチde俳句」という活動を手に入れられたことが、すごくありがたいですね。ご飯を頂いていいんだって、俳句の神様に認めていただいたような気がしています。

——お話を伺って俳句にはまだまだいろんな可能性があると感じました。今後さらに活動が広がることを期待しています。本日はありがとうございました。

(インタビュー／協会職員 丸 弘之)

執筆／ライター 更田 沙良